

“淨瑠璃雜誌”と私

社長 新良貴健 一一

光輝溢るゝ軍國の新春を壽ぎ迎ふる
ご共に讀者諸賢の御清福を祈上ます

◇

×卷頭言だからと言つて必ずしも鹿爪らしい文字を羅列しなければならぬ譯のものでは無い。又それ程肩を凝らせて推敲これ努めてみても讀者の側では肩を凝らせて迄熟讀して遣らうと言ふ雅量もあらまいし、其處は時代の流れと俱にいと簡潔に、いとも卒直に、要は言はむと欲する處を語り盡せば筆者の欣快これに過ぎるものは無い……と無遠慮に考へて居る次第である。

◇

×淨瑠璃と言ふ言葉は私にとつて非常に懐し味の溢るゝ雅趣發露たる、恰も愛着に震へながら差し延べられる祖母の柔し

い腕を聯想せしむるものがある。尤もこれは大阪の下真ん中に生れ育つた然も御靈文樂の眞摯なファンであつた筈の父やその周囲の者から培はれた還境的なものも多分に含まれてはゐるが。然し文章の綾とか曲節の妙とか言つた繊細な穿鑿は別として、物語り其のものが忠義に始り、死するも忠義、生くるも忠義と言つた所謂主従精神が船場傳來の日常生活と渾然相一致する處に自然の融和を覺へたことも事實と言へよう。

◇

×若い癖に淨瑠璃なんて……其う言はれて見ると成程無理もない。眼に入るもの耳に入るもの全體が老一色で塗り潰されてゐる。若い者の出る幕でない場面が其處にも此處にも展開する。が其の老たるや未だ若さを失はざる潑刺極りなき老で……尤もホルモンの若さでもあるが……決して氷炭相容れない底の窮屈なものでは更でない。それでこそ曲りなりにも五十年と別に否な處情も持たないで、心ゆくまで趣味を満喫し

藝道に精進が出来たのであらう。



×樋口吾笑老と「淨瑠璃雜誌」を中にして語り合つた事は一再では無い。あの熱火の如き斯界革正の爆彈論なんか何度拜聴したか解らない。時には經營至難な泣事も出る。至正公平であり度いがと云ふ聞き捨てならぬ弱音の出た事もある。が終止符は何分老骨で……で梟がつく。剛直果敢、鬪志滿々たる氏にも斯うした哀調の一面があるかと想へば人事ならず憤懣を覺へる事がある。過去四十餘年孜々として斯道の進展に敢闘し盡した老の功蹟に對して、豈江戸ッ兒たらずとも俺が引受けたと出たい處である。



×淨瑠璃の發祥地たる浪速の生んだ唯一無二の機關誌である。今更若いも苦いも言つてゐられない。私が遣らう、君も老骨に鞭打つて今一奮張りやり給へと飛ん飛ん拍子に總ては運び同人諸賢の賛同も得る、挨拶狀も書く誌上座談會の目論見も作る等々二度大晦日を迎へる様な昨日今日である。



×力を籠めて握り締めてゐるパトン。次の走者に手渡すまでの苦勞は並大抵のものではない。が翻つて多年に亘つて抱懷

してゐる數々の理想を具現せしむる絶好の機を得た事に想起したならば言ひ知れぬ愉悅を覺ゆる。

乞ふ。變りなき御指導と、幾久しき御聲援を……。



×殊に從來斯道中心主義を以て至公至平久しく本誌を援護せられたる同人諸氏が完全なる諒解の下に倍舊の指導と金玉の投稿を快諾せられ彌が上にも誌上に光彩を放つべきは欣躍に堪へざる所なり。



×新良貴健二と云へば至つて硬苦しい名前で御馴染も薄い様に思はれるが所謂素義界の俳名で白木草樂なりと云へば讀者諸君の内にも相當の知己を有してをる心算と聊か心丈夫に思つて居る事を鳥渡書き添へて置く。(一八・一・八)

×

×

×

×

×

×